様式 C-7-2

自己評価報告書

平成 22 年 6 月 16 日現在

機関番号：11302
研究種目：基盤（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19530577
研究課題名（和文）幼児期の向社会的行動と社会化に関する発達的検討

研究課題名（英文）Development of prosocial behavior and socialization on childhood

研究代表者　伊藤　順子　（ＩＴＯ　ＪＵＮＫＯ）
宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10331844

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：幼児　移行　適応　社会化　向社会的行動　環境

１．研究計画の概要

本研究では，家庭，教師，仲間という環境の中で，幼児が自己を主体として以下に向社会的行動を学習しているかを明らかにするために，入園前年度から卒園年度までの期間，縦断調査を行う。調査では，入園前後の幼児の生活を，家庭から園への「環境移行期」，幼稚園での「適応期」，園から小学校への「移行準備期」の 3 つの段階から捉え，「家庭での社会化」，「仲間教師との相互作用」，「向社会性の個人差」，「社会的スキル」がいかに変容していくかを検討し，child × environment モデルを構築する。

２．研究の進捗状況

(1)予備調査（2007 年度）

2008 年度入園児の縦断調査（H20 年～H22 年）のための予備調査として，2007 年度入園児を対象に，①入園以前の家庭での社会化（養育態度・育児サポート・母子分離），②仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係），③向社会性の個人差（向社会性についての価値観・効力間），④年度末における社会化の達成度（社会的スキル）を検討し，調査項目等の精緻化を図った。

(2)本調査（2008 年度～2009 年度）

2008 年度 3 歳入園予定の幼児を対象とし,child×environment モデル（仮説）を基に，①入園以前の家庭での社会化（養育態度・育児サポート・母子分離），②仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係），③向社会性の個人差（向社会性についての価値観・効力間），④年度末における社会化の達成度（社会的スキル）を検討した。その結果，移行期初期に母子分離がスムーズな幼児は，移行期前半(4-13 週)で友だちからの攻撃行動が少なく，移行期終期には良好な仲間関係を形成しており，母子関係→仲間関係という移行過程が示された。対人行動に関しては，移行期前半で自発的に友だちの困窮場面に介入し援助を行った幼児は，移行期終期には良好な仲間関係を形成し，向社会的な効力感が高かった。一方，依頼に応える介入は仲間関係や向社会性と関連がないが，教師－子の関係に負の相関があった。以上の結果から，困窮場面における自発的介入と依頼に応える介入は異なる機能を有し，移行期においては，『困窮場面への自発的介入→仲間関係→向社会的な効力感』という社会化の過程が示唆される。一方，移行期前半で攻撃行動が多い幼児は，移行期終期の向社会性（価値観・効力感）は低く，終期で良好な仲間関係が形成されていない幼児は価値観が低いことが示された。以上の結果から，向社会的な価値観と効力感の形成過程は異なり，移行期においては『攻撃行動／仲間関係→向社会的な価値観』という社会化の過程が示唆される。また，保育者は，依頼に応える介入が多い幼児に対して意図的な関わり方をしており，『仲間集団での援助依頼→保育方針・経営』という環境構成過程が示唆された。

2009 年度は，4 歳児クラスの進級児（2008 年度 3 歳入園児）を対象とし，①仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係），②向社会性の個人差（向社会性についての価値観・効力感）を評定した。その結果，子育て支援状況と社会的行動との関連については，(1)入園前後で子育てに対して周囲から道具的サポートが得られている母親の子どもは，入

園後友だちへの援助が多く，攻撃行動が少なく，環境移行がスムーズであり，(2)母親への情緒的サポートの低さは，即時に子どもの社会的行動へは関与はみられないが，適応期の子どもの攻撃行動を高める傾向にあること，が明らかになった。さらに，養育態度・母子関係と社会的行動との関連については，(3)母親の統制（子どもの意思と関係なく，母親が子どもにとってよいと思う行動を決定し，それを強制する傾向）が高い場合，移行期には影響がみられないが，適応期の仲間関係に影響を与え，仲間への援助行動が少ない。(4)さらに，統制が高い場合，移行期には仲間からの援助を必要とするが，適応期では仲間への援助回数が少なく，向社会的な相互作用が芽生えていない。一方，(5)母親の応答性（子どもの意図・欲求に基づき，愛情のある言語や身体的表現を用いて，子どもの意図をできる限り充足させようとする傾向）が低い場合，移行期では友だちへの攻撃行動が多い傾向にあることが明らかになった。以上の結果から，環境移行期・適応期において，子どもが仲間と適切な相互作用が持てないことには，母親の統制の高さ，応答性の低さが関与していることが示唆された。

３．現在までの達成度
②　おおむね順調に進展している

理由
　当初計画通り，2008 年度入園児を 2 年間（家庭から園への「環境移行期」，幼稚園での「適応期」）追跡調査し，データ分析が終了している。本年度は最終年度として，園から小学校への「移行準備期」のデータを収集し，総合分析・モデル構築の準備を行っている。

４．今後の研究の推進方策
　2001 年度は，5 歳児クラスの進級児（2008 年度 3 歳入園児）を対象とし，①仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係），②向社会性の個人差（向社会性についての価値観・効力感）を評定し，家庭から園への「環境移行期」，幼稚園での「適応期」，園から小学校への「移行準備期」の 3 段階のデータを総合的に分析し，child×environment モデルを構築する。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 1 件）
伊藤　順子　向社会性についての認知はいかに変容するのか　－幼児期から児童期にかけての検討－　幼年教育研究年報　広島大学幼年教育研究施設　（2009）　有　305-13.

〔学会発表〕（計 8 件）
(1)伊藤順子　子育て支援環境・母子関係と幼児の社会的行動との関連：環境移行期から適応期にかけての変容　日本発達心理学会第 21 回大会　2010 年 3 月 27 日　神戸国際会議場
(2)伊藤順子　幼児における向社会性の発達と社会化の過程：環境移行期における 3 歳入園時児の変容　日本教育心理学会第 51 回総会　2009 年 9 月 21 日　静岡大学
(3)伊藤順子　環境移行期における社会的行動と仲間関係－3 歳入園児の社会的行動・攻撃行動の分析から－　日本発達心理学会第 20 回大会　2009 年 3 月 24 日　日本女子大学
(4)伊藤順子　環境移行期の『仲間関係』・『保育者－子どもの関係』と社会的スキルとの関連：3 歳入園児についての検討　日本教育心理学会第 50 回総会　2008 年 10 月 11 日　東京学芸大学
(5)伊藤順子　幼児期の社会性の発達に関する質的検討Ⅰ　日本発達心理学会第 18 回大会　2008 年 3 月 21 日　大阪国際会議場
(6)伊藤順子　援助すること・援助されることの意味とは－幼児期における縦断的調査から－日本教育心理学会第 49 回総会　2007 年 9 月 17 日　文教大学

〔図書〕（計 1 件）
渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎（編）　ナカニシヤ出版　2008 年　267 ページ